

# 看護過程の学内演習における学生の陥りやすい傾向と今後の課題

看護専門学校 ○藤原幸子 峰村淳子 曾山紀子 千葉いちよ  
平田昭子 宮崎フジ子

## I はじめに

本校では「看護過程」を科目として位置づけ30回の授業を講義10回、演習20回に分けて行っている。演習では2事例の紙上患者を用いてアセスメントから計画立案までの展開のプロセスを指導している。それらの教授方法の実際については、東京医科大学看護専門学校紀要第1巻第1号に報告した。

その中でこの科目について学生の学習効果をあげるための課題として、初学者に対しイメージ化をはかれるような教授方法の検討と学生のレディネスにあわせた演習用紙上患者の検討の必要性を述べた。これらを検討しつつその後の授業を進めてきた。しかし演習を重ねる中で、すでに学習目標は設定しているものの学生の到達度を知るためには事例に合わせ更に具体的な到達目標設定の必要性の再認識をせざるを得ない結果となった。

そこで今回の事例演習における学生の展開状況をまとめ分析することにより、学習上の問題点を抽出し学内演習での限界を明らかにして教授上の課題を見出したいと考えた。我々は、臨床実習において、これらの傾向をふまえた上での指導の必要性を常々感じていた。今年度の演習結果を「学生の陥りやすい傾向」という視点で分析を行うことにより今後の実習指導に効果的に生かせることも願いまとめてみたので報告する。

## II 授業概要

### 1 学習目的・目標

目的 看護過程の展開方法を理解する。  
(アセスメント～計画立案まで)

目標

1	「日常生活に関する情報」および「健康障害に関する情報」を正確に記述できる。
2	障害による変化のデータを選別し、記述できる。
3	現在、行なわれている治療の目的と内容を記

	述できる。
4	看護問題を考える上で気になった情報を関連類似情報群として選別し、記述できる。
5	選別した情報群の意味について知識・文献を活用し、「解釈・分析の視点」で選別し、記述できる。
6	解釈した情報を基に、看護問題を記述し、問題間の関連・統合が考えられる。
7	「優先度設定の基準」に基づき、看護問題の優先度が決定できる。
8	標準的な術後回復過程を想定し、到達目標①②が設定できる。
9	できる限り測定可能で達成可能な解決目標が設定できる。
10	アセスメントとの関連性を考えながら、具体策を具体的に記述できる。

### 2 対象学生

26回生 82名(2クラス編成)

個人演習Ⅰは既に終了

### 3 期間および時間数

平成2年4月9日～6月4日(2年次)

16時間

### 4 演習課題

定型的乳房切除を受ける紙上患者の術直後から術後24時間までのアセスメントおよび計画立案

### 5 指導過程

回数	学 習 目 標	指 導 内 容	留 意 点
	目標 1. 「日常生活に関する情報」 「健康障害に関する情報」 を記述する	事例を配布し、データベースの記入	※ 春期休暇に課題としてまとめさせた。
1	ガイダンス (導入)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 定型的乳房切断術の術式・術創について VTR で説明。</li> <li>○ 術直後の患者の状態を、モデル人形に設定し、説明 (ex O<sub>2</sub>マスク、胃チューブ、ウインドサクションチューブ、バルーンカテーテル、持続点滴)</li> <li>○ 計画立案の設定時期について</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 乳癌の手術に伴う、特徴的な合併症をイメージづけた。 (ボディイメージの変化、運動機能障害…等)</li> <li>○ 身体への侵襲について考えを深められるようにした。</li> <li>○ 帰室直後の患者の状態をイメージづけた。また手術後24時間以内の覚醒状況、疼痛の変化、左記の装着物の除去される時期、およびチューブ内の排泄物の内容の変化について説明した。</li> </ul>
2	目標 2. 障害による変化のデータを記述する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 診察所見・検査データ・麻酔との関連で、チェックしておくべきデータを系統別に示す</li> </ul>	
3	目標 3. 現在行なわれている治療内容を記述する	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ まとめ方 5つの視点を掲示 &lt;全身麻酔&gt; ①薬物の作用・副作用(合併症) ②麻酔のための処置(前処置を含む) &lt;術創&gt; ③合併症 ④術創のための処置 &lt;術後&gt; ⑤術後の指示</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 文献の丸うつしにならないよう、治療の目的と関連づけてとらえるよう指導した。</li> </ul>
4 ・ 5	目標 4・5 気になった情報を情報群として記述し解釈できる	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 情報収集の視点を説明 視点……術後合併症 ①呼吸器合併症 ②消化器合併症 ③疼痛 ④感染 ⑤大胸筋・小胸筋切除による呼吸抑制・喀痰喀出困難 ⑥心理的(病気に対する不安・ボディイメージの変化に対する不安)</li> <li>○ 呼吸器系の看護問題を1例、まずは学生に展開させた、その後、模範例を解説</li> <li>○ 消化器系合併症・苦痛・感染・不安の4例の問題を展開させた。その後、模範例を解説</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全体的にできていない点を示し、模範例と比較しながら解説した。</li> <li>○ 模範例を提示し、全員が確認できるようにした。</li> </ul>
6	目標 6・7 看護問題間の関連性を考え、優先度の決定ができる	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 苦痛の問題をとりあげ、起因要素の統合について説明</li> <li>○ 問題点のリストを配布し、マズロ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生理的欲求に位置づけられる問題の中での優先度の決定は混乱するものと考えた。そこで生理的欲求の中で生命に直結する問題は更に</li> </ul>

		一の欲求体系に基づき優先度を決定させた。	優先度が高いことを説明した。
7	目標8・9・10 到達目標の設定・具体策 の立案ができる。	○看護過程Ⅰに使用したテキストを 活用（設定上の留意点を想起させ た。	○アセスメントと計画立案の関連性 について想起させた。 （情報群・分析の視点①～④）
8	まとめ	○アセスメントと計画立案の関連性 について	○演習Ⅰの資料を使い、展開の基本 は事例がかわっても同じであるこ とを意識づけた。

### Ⅲ 学習結果および考察

#### 1) 情報収集…学習目標1～4

データベース部分においても、仮説問題に対する情報群の欄においても、情報の不足がめだった。1つの情報をもとに関連する他の情報を続けて収集するという作業には致らず、情報を選別したり、疾患や治療検査データの理解に基づいた選別も難しかったようである。さらには患者の訴え、つまり主観的情報にとらわれ、それと関連する客観的情報まで意図的に集めきれなかったり、心理社会的側面からの問題把握のための関連情報として人間像を現わすような一般的情報が見落されていた。これらのことから情報全体が深まりや根拠性の点では浅いものとなってしまったようである。

記載上の傾向としても、中には主観的情報、客観的情報をとらえ違いしていたり、情報の記載順序も関連性の高いものから書くということではできない者が多かった。

これらの原因としては、既習の麻酔に関する知識、術後の合併症、手術に伴う看護、疾患に関する知識が曖昧であり、これらの知識が統合され、関連性をふまえて応用できるという段階に達していないこと、又、看護過程Ⅰで学習した概念（情報の意味、情報収集の仕方等）についての認識が不十分であったことが考えられる。さらにはモデル人形やVTRの活用はしたもの、臨床実習未体験の学生にとって手術後の患者の状態そのもののイメージ化にも限界があり、それらをふまえて意図的に情報を集めるという所までには至っていないということが考えられる。

このように、紙上患者を用いて看護過程の展開方法の基礎を学習する以前の基礎知識上の問題が大きく関与している。既習の知識を統合し活用するという学習形態は、演習Ⅰ終了後であり、2度目の体験ではあるが、今回また新しい事例で外科の術後の患者ということもあり、やはりイメージ化しつつ関連知識を自分で想起するという学習はこの時期の学生にはかなり難易度の高いものであったようである。イメージ化、概念

の具体的理解のための授業方法の検討がさらに必要である。情報収集の演習段階では、文献の活用方法に慣れていない学生に対し、適切な文献の紹介とその活用の仕方に関する助言も必要である。

#### 2) 情報の文析・問題の明確化…学習目標5・6

情報の解釈・分析の視点として、本校では「①問題の種類と程度②問題の起因要素③問題の成り行き④問題に対する患者や家族の対処能力」という考え方を活用しているが、それぞれのことばの持つ意味と関連性について十分に活用できる程の理解に至っていない者もいた。その結果それらの学生は、記載上の要領を把握することも難しく、この段階の演習で非常に苦慮しているようである。

具体的に述べると、①については問題の種類と程度を的確にポイントを焦って記載できておらず、程度の判断が難しかったようである。②については、情報を活用した分析になっていない者が多く、病態生理的な分析については内容に個人差があり、たとえよく分析されていても文献に示されたままの記載であり、個性がなかったり、原因や誘因をどこまで明らかにすべきかについても迷いがあったようである。③については、今回は術後の展開であり問題そのものが予測問題が殆んどであったため、何をどこまで書けばよいか難しかったようである。そしてやはり文献の内容をそのまま用いて現実性・個別性の乏しい者もいた。④については、活用できる具体的理解に至っていない者が多く、空白がめだち視点に沿った内容でない者もいた。

全体的にこの演習段階は知識や文献の活用を大いに要求される段階であり、これらに慣れてない学生には、難易度の高い演習であったようだ。

問題の明確化・記述に関しては、今回は問題点の方向性を示して演習を進めたので特に学習上の困難は生じなかったが、分析内容と記述する問題内容が考え方の点で分断している者もいた。

このような結果に至った原因は、やはり知識不足の

ために情報群の意味の解釈・分析ができていないということが考えられる。つまり、1つ1つの視点に沿って考えるための知識が伴わないために学習成果も上がらないという結果ではないだろうか。又、情報を生かした分析ということがどういうことなのか、さらにはその必要性そして情報分析の根本的な目的や意義を見失った結果とも言える。実習未体験の学生にとって、事例の変化をイメージ化しつつ問題の経過をよみとり、それを視点に沿って簡潔に表現するということは難しいことである。又、この時期の学生の場合、アセスメント段階には到達度の限界があると思うが、概念の講義の際、具体的理解を高めるため、視点に沿って展開モデルを今まで以上に示すなどの工夫も必要である。さらには、分析をすることの目的・意義の意識づけをさせることがまず大切であり、意味をふまえて事例展開が行えるようにさせる必要がある。この段階においても、文献の活用が必須であり、それらについての助言、知識の応用の仕方の具体的アドバイスが大切である。さらには、分析①②③④のそれぞれと、看護計画の関連性をさらに強調して示すことでより具体的理解につながるようにしたり、それぞれの意義が考えられるようにすることが必要と考える。

問題の記述に移る際は、分析内容と問題表現との関連性を強調していくことが大切であり、まずは看護上の問題とはについてのしっかりとした認識につながるような教授法の検討が大切である。

### 3) 計画立案…学習目標7～10

看護問題間の優先度設定については、生理的ニードの問題がいくつかあると、その中での優先度の判断が困難になっている。これについては、どのような条件によって優先度決定は影響されるか、具体例を示して理解させる必要がある。

到達目標、解決目標の設定に於ては、患者を全体的に捉えて最終ゴールを設定することと、次の可能な段階を捉えて設定する目標とを混同し易い。また、目標表現の主語が看護者主体になってしまいやすい。その原因として、乳房切除術後の経過や、術後24時間にはどのようなか等、身体の変化が具体的にイメージしにくい状態であることが考えられる。なぜ目標設定が必要なのか評価と結びつけて、目標設定の意義をわからせることが重要である。解決目標についても、情報の分析・解釈が生かされていない。これは、情報の分析・解釈での問題の原因、成りゆき、自助能力を十分解決目標に生かせるような指導強化が必要である。

つまり一つの問題のモデル化を活用し具体的に分析内容がどこに、どのように活用されていくのか示していく方法が必要であろう。

具体策については、抽象的で一般的な項目が多かった。その原因として、疾患をもつ人間全体のイメージ化や、看護活動の実際などが、総合的に見えないと具体化が困難であることが考えられる。これについては、情報とのつながりをわからせるよう意図的にかかわりをするのが大切である。

現実的、具体的な計画立案への指導対策として、現実に近い病床の小設定をし、自分の立案した計画を使ってみることも一案と考える。また、5W1Hの枠組みを作り、その用紙に記載してみる等の方法も考えられる。

## Ⅳ まとめ

看護過程の学内演習における学生の陥りやすい傾向と今後の課題が明らかになった。

実習未体験の学生にとって事例の変化をイメージ化しつつ、展開していくことはかなり困難であることがわかった。従って、イメージ化にも限界があることをふまえて、各目標毎に具体的理解を高めるため、展開モデルをいくつか示したり、視聴覚教材を作成し、手作り教材によるイメージ化への工夫も必要である。

以前から事例の検討を積み重ねてきているが、初学者であればあるほどできるだけ単純な疾患で、しかも全体像がイメージしやすい事例を設定することが重要である。また、既習の知識を統合するためにも、各学習目標段階において、適切な文献の紹介とその活用方法を指導する。そして、各学習目標の目的・意義をまず意識づけ、事例展開を行うようにさせることが必要である。

このような時期の学生に対しては、看護技術や看護学の各論の授業の中で早期のうちから、思考過程に基づいた看護展開の方法を段階毎に体験していけるような授業計画を組むことも必要と考える。また、枠組み形式にこだわらず思考過程の行き来の必要性、ならびに思考過程と看護の目的遂行との関連性を本質的に考えることができるような指導の重要性を感じる。

実習での実際の受持ち患者は、紙上患者のように単純ではなく複雑な状況であり、それを理解するのはかなり困難である。従って、教員、指導者が学生の個性や段階に合わせ指導を行うことが重要になってくる。

効果的な実習指導を行うためにも、今回明らかになった学内演習での限界をふまえて実習場での指導にあたりたい。